

加布告案

已卯

911.3

力





叙



以吾詩人見觀彼邪者流
之歎也亦以吾詩人語論
彼邪者流之言不可也河
集梓其集序其以且其
以情言其言情言以得之曰

所少詳也云々也也生栢梁
工匠爰絃々種蒔又先居
先睡以所畏語云俯凡歎る
不取や不取者通替々や

横塘逸民書



河内集序

歌々もむさひあひあひにわさてもう人
よむさひあひあひあひにわさてもう人
のちあひあひあひあひにわさてもう人
多きのみあひあひは新波の國所
まゝあひあひあひあひにわさてもう人
あひあひあひあひあひにわさてもう人
あひあひあひあひあひにわさてもう人

かゝるものゝしるしにあらは
るるもの

秋庭

かゝるものゝしるしにあらは
るるもの

凡例

一 此書の内容は、
おのゝかゝるものゝしるしにあらは
るるもの

一 此書の内容は、
おのゝかゝるものゝしるしにあらは
るるもの

如示知集 己卯

正月

若菜

さよふちかみについで古葉さくらあまし時めりる 春門
ね日さけけふけにねりさちてそのあつきの里にあらる 春條
白雪のふるの宮人ゆふけに神乃出ぬの若菜つむに 是雪
こやこ人わまつんとさうとてさうのふしの事やうん 貞明
うちまて若菜つんと里子若菜の丘をりさにくる 是教

雪あふ小川の峯は雪のまじりて雪の小田にまじりて
 祐南
 梅もやけふにも梅と花の雪は雪のまじりて
 集子
 白梅の袖は雪のまじりて雪のまじりて
 祥史
 二本の雪は雪のまじりて雪のまじりて
 嘉言
 この雪は雪のまじりて雪のまじりて
 秋庭

鶯

夕ぐれの小川のやまに越えて啼き雪のまじりて
 春門
 夕ぐれの小川のやまに越えて啼き雪のまじりて
 嘉言
 春風は雪のまじりて雪のまじりて
 祐南

雪あふ小川の峯は雪のまじりて雪の小田にまじりて
 祐南
 梅もやけふにも梅と花の雪は雪のまじりて
 集子
 白梅の袖は雪のまじりて雪のまじりて
 祥史
 二本の雪は雪のまじりて雪のまじりて
 嘉言
 この雪は雪のまじりて雪のまじりて
 秋庭

恨意

雪あふ小川の峯は雪のまじりて雪の小田にまじりて
 祐南
 梅もやけふにも梅と花の雪は雪のまじりて
 集子
 白梅の袖は雪のまじりて雪のまじりて
 祥史
 二本の雪は雪のまじりて雪のまじりて
 嘉言
 この雪は雪のまじりて雪のまじりて
 秋庭

うみもぞうやう衣もなにもはぬは後よ 遠
 恨つうちむれはつるにちりふふな 知澄
 しみれ山井乃信あふみぬ恨つめをばか せよ
 ういありこるお恨もろくくは海の果にまいて 半之
 はるちカゆにふ人の侍今うみのほと成る 高柄
 ううへもかいてちも抱今ふ事ふ命は恨れろ 貞明
 つれもちう人の心なまはつてぬとぬを多き連 重磨
 けりも些の命はと一みつなも人を恨つるね 思々
 中へぬて恨むるまふつと心の奥にふと 盛元

さふもやうまたなく恨中あなひのへんせむが 敦茂
 思ふまたつまずにぬるうやうまぬを恨みけれ 愛治
 ちかやわふにうき人由あるはなぬぬを恨みん 經香
 秋のよりちもふしまたふに恨もをてぬぬにさる 長賢

二月

春雨

夕れつるうをれてふきあやうの雨やふりける 春門

うろ中へ矢の雨な雪降てはをいふ山竹の落 秋庭
 はれとふ人かたもく降くしる春の雨を 今
 うちかむ山をわたりけ名のうで花は傳て去るを降 知れ
 かひの音も近く聞えて去やう花のうを矢の雨な 集子
 いづと花はるんちやう雨まつちるはるの夕ぐれ 美足
 庭の秋をこれけり枝も花もいゆ矢の雨故 宣暢
 矢の雨も去る降て去やう花はる今も成るを 直恒
 矢もあけさういふのうかひの雨も色もさうり 兼菴
 立わる朝氣のうをみかきさうじやく降る矢の雨や 直入

此は春の梢より矢の雨を花まつ人より注ぐ成る 長安
 年を過しその色もく矢の雨けさう恒つる中を竹 兼菴

雉

木の耐と事いすけり山をいふのうをいふ啼きとを 春門
 朝うに明日もいふえん入つる入れ固はけり啼き 盛亮
 は鷹の羽翼のやりけり衣つる意いふ啼きとを 是夜
 意もつるいふすつらい思いつるねをいふけ 道堪
 指人のうろつらうなてはる野に都もさういふ啼き 全
 夏より矢いふはもきけりけのねをいふす啼き 嘉言

朝日さびき守ふ木のかたわらうらわはしくさきすれ 蓮和
 叶の名けきのう図にさるれや春もあふはすきく 文彦
 休保城のあめの衣つりこにもすむかうむつ時の原 嘉吉
 ね日さくこのきく持人をあうれうおきふちり 宣暢
 は雪のかうちのか雪のねふはおもあうきすきく 盛光

寄山恋

耳もけやうんやうかうなるたのひるを馬きねい 後子
 うらうちもはらうをきうてあふるけいふたひられ 長良
 はさうて枕のちうけやうたなまうのこをきうけき 秋庭

うつる枕のちうけはさうていさうもあうらうたなまれ 清隆
 年を度てなふんうていさうあう何のちうちもん 今
 なまうふふふ此のちうのれいさう時をぬぬ日さき 知清
 はさういさう人あのはうきさけいさういさうあう 長龍
 あまういさうあまうのけいさうあまういさうあう 祐常
 かつさやあまういさうあまういさうあまういさう 貞明
 赤たのなまういさうあまういさうあまういさう 長好
 いやさういさういさういさういさういさういさう 春門

枕

うーの川ちうー花ようきしも夢いしるも寝る也 知世
 夫ふみあきしは沼はおもふふかたてり寝るを 敦茂
 百もの夢あきいて水底の花の影も寝るらん 長閑
 みくもは井の底の夕寝もふしのうも寝る寝 志か子
 らうれて相いさす花も川割漱も寝る寝 長記
 うみへうあきの川波きたえて山吹の漱も寝る寝 重磨
 やりし寝やな井の水のきむいなるあやひヨ夕寝か 万孝
 花は根はるさうもさうたのさうあさる寝る寝 知世

海客

新喜ばふ此ひつになしやちうー花も寝る寝 知世
 山吹の影も寝る寝 知世
 うちかへ田あき月ふるよしとて寝の夢も寝る寝 春門
 ありのう袖のうた風は波の花こそよちうきれ 志か子
 風あき波もききき人のも向きしとてその松原 文彦
 ありけよりせきしひて大井のうねに目とてきあ 永久
 明石も磯のうきさう衣袖おきくも沖津波風 盛光

おもしろいこの汐漕をり舟の法ももろく風よくや
凡そ田舎の法もこれ大抵のこの浦に立寄るなり
あのやのやの汐漕の夕煙もいそいそ白浪も
溪中の子よりのこころは波のそよするふくまの浦長記
志はやり志は人の浦はつらつらと事跡のそよまんと
うの庵にそよまのこころはつらつらと事跡のそよまんと
ひつらひつらの浦はつらつらと事跡のそよまんと
あやうさたち帰るる人の浦はつらつらと事跡のそよまんと
春門

四月

新樹

この園のありし下町おひそく神山のありし下町
香ももろくもこれとて青葉のそよまのそよまの
咲きももろくもこれとておひそく事跡のそよまの
花入時おひそく事跡のそよまのそよまの
つらつらおひそく事跡のそよまのそよまの
志

うちいふ庭にあふちいふけりやう
うまけり陰々きりて幾多
むの香あふちいふきりやう
うまけり陰々きりて幾多
うまけり陰々きりて幾多

不逢

かき川身とあるといへば、
ひさしあひう後ろきまゝ
むすいき法に折小舟たか
めづる三浦よりわが貝ありて
りやを神に捧ぎ奉るは、この年より清徳

恋衣にぬきまき夢のねる愛をわぬ古きやうなま

予への好む心は吾恋ハミはるもあらず此の心

うちにてあひえんといふ系におきやぬ歟をす

行系はねぬ糸のたをながくふくまてきりあへん

たれもあそびに
いづる川を渡る

あは波はさやけをあらうとて浦さひより

彼のこゝろはあつてんぢやうあつちまあつてうまなる恋もどるわ

抄いやるるてそふ系と八邊乃海村あるはう都

さうとうきにな
る年月のあひだにのふやうにおいりけ

四季

小山田れいはるうれは恒はゆきちう雀あかり
直恒
ふちある人やほんくはるふのふいむらう
直英
あふふふの郡は恒いふあふふふふふ
重孝
ゆふれあふふふふふふふふふふふふふ
盛光
畔をり水ふふふふふふふふふふふふふ
敦茂
呉せれふふふふふふふふふふふふふ
鳥鞠
ゆ風ふはふふふふふふふふふふふふふ
蕭蕭
夕きふふふふふふふふふふふふふふふ
今

残の雄うふふふふふふふふふふふふふ
道恒

是れふ山田れいはるうれは恒はゆきちう
秋庭

山水のなふふふふふふふふふふふふふ
春門

壬四月

夏風

申ふれふふふふふふふふふふふふふ
常御
ふおふふふふふふふふふふふふふ
今

夏衣かききりて吹風もふおほえたるを初るなり 秋庭
儼るを井松吹風より来て文もきぬ山の下に木 蕭々
夕立なる河へ入流心のむらなる風小袖をるあり 直入
秋ちく今あるみ入沖つ風も涼くもる波うれ 高柄
夏山へ雲恒清おびきふふがふなる峯村松風 唐國
おもひ人の心でゆく水なる雲ねの川入夏の文風 之信
五宿丹すものさうけおひきひて風も涼く半宿なり 綾子
さむくさむいやうなれさむあやうさるあうきう那 ち子
雨はる朝とのあけひる雲よりあふきとほせ風の涼さ 盛元

雨ふれてう枝あちる中ふえ山の中へ 雨も涼き 長記
すーまたおほあふきて文なる月ももてて風をこほて 雲
雪さふあふけ風なるさうえておけい必て文あふり 春門
夏月

文けおあへる末葉の文けさふ光をさする山の文月 萬葉
秋ふれあれふう 詠波さかほとさけらうなる月 明訓
ふる浪のむもされて文川ぶらうなる月けけを涼き 祥史
大井川のさきにすむ水あれとちれておき夏の月 改壽
みちのけをさるる雲けうてはすさるあふき夏の月 是教

ふじ(まゐる)もあはれをあらうつれるあはれ短おの月 出渡
家と川のほきはなやそ月新なるれてあはれ文の取 底玉
月づかふふやそ吹風をうかひををこしき 嘉言
夕まけあらうまゝあちうて月まきやう秋のぬれ衣 全
月けかふれてやそ文のけ芦屋の束のうけけ而良 秋庭
文けよ月をさそふまふおのふをぬれぬれ 道堪
文のぬれ月よりふけあそふをぬれぬれぬれ 春門
時をぬれあつる志のひねをうかふふいそきくらむ 道堪

夏恋

ふじ(まゐる)もあはれをあらうつれるあはれ短おの月 出渡
家と川のほきはなやそ月新なるれてあはれ文の取 底玉
月づかふふやそ吹風をうかひををこしき 嘉言
夕まけあらうまゝあちうて月まきやう秋のぬれ衣 全
月けかふれてやそ文のけ芦屋の束のうけけ而良 秋庭
文けよ月をさそふまふおのふをぬれぬれ 道堪
文のぬれ月よりふけあそふをぬれぬれぬれ 春門
時をぬれあつる志のひねをうかふふいそきくらむ 道堪

常卿

宣暢

思之

直恒

菊子

孝孝

長社

春門

五月

梅雨

名をきき時をききしはく山をばらまふ入月雨の比 一道
 あやこゆる法田入水となりなるあやめちち入月雨の比 美陰
 日なふるはあひなふるを雨をけつる月雨の比 敷茂
 とはふるも月雨の比はかふるも雨をけつる月雨の比 後子
 秘さあはれきけりあはれなひつる入月雨の比 嘉子
 あつたけききしはく水なけ川なけききしはく月雨の比 嘉子

人けのききしはく水なけ川なけききしはく月雨の比 嘉子

顯恋

ひとまゐり入水けききしはく水なけ川なけききしはく月雨の比 嘉子
 うやいふくはみ涙を神りて人の心をば世あらうけり 世英
 せまきとむる神の志くは波をてききしはく水なけ川なけききしはく月雨の比 信子
 志のいね入神ふあまり涙を世あらうけりはかきしはく月雨の比 信子
 ちきりおきしはく水なけ川なけききしはく月雨の比 思子
 いふれはききしはく水なけ川なけききしはく月雨の比 長記
 志のいね入神ふあまり涙を世あらうけりはかきしはく月雨の比 嘉子

こわれもきえぬ光を玉に人あそびる夢のうらり
 る 靉
 めきとひまをそと小窓のうらりそとくもけ常い
 夕明
 夕やけとそとそと白きうらりそとくも夢のうら
 夢
 くれけあそびるこれとあれ江のうらり涼く夕風そと
 祐
 水もけ風もあそびる沙汰とそと夢のうらり涼き
 夢
 ぬも玉に人あそびる夢のうらりそとくも夢のうらり
 全
 小窓系もあそびる夕夢とそと夢のうらり涼き
 長記
 身にく吹あそびぬ夢のうらり夢のうらり涼き夕風
 夢

夕白

教を火へりあういふせき中垣のうらり涼く夕風そと
 夢
 うらりく小葉を垣のうらり涼く夕風そとくも夢のうらり
 夢
 夕夢とそとくも夢のうらり涼く夕風そとくも夢のうらり
 夢
 夕夢とそとくも夢のうらり涼く夕風そとくも夢のうらり
 夢
 夕夢とそとくも夢のうらり涼く夕風そとくも夢のうらり
 夢
 夕夢とそとくも夢のうらり涼く夕風そとくも夢のうらり
 夢
 夕夢とそとくも夢のうらり涼く夕風そとくも夢のうらり
 夢

夢雲急

夢に雲急はくそと白き入いつくかきそと夢のうらり
 夢

多しき初花さきわにそめて大空に花を振らん 廣國
 葉はも夜ふさぎてまふさうふさうとる時に来ふらん 蒲島
 風かけ波もじつ流る秋きて秋なる時路の玉川 斎藤
 面をれむらんをるる涙流れ来ふ秋の好風 長元
 なるはれおるも様うの秋きてける秋の好風 昭満
 くるぬあはれおる入下草きてるの時を嘆きけり 祥史
 朝日さけおる入玉川きてる時を嘆きけり 美濃

野虫

夕風のやにまふさきもさるる秋の大空をさるる秋 春門

まるはれおる入玉川きてる時を嘆きけり 美濃
 申ふけもくくくくくくくくくくくくくくくく 春門
 はらうの秋に入玉川きてる時を嘆きけり 美濃
 あはれおる入玉川きてる時を嘆きけり 美濃
 春のさきもさるる秋の大空をさるる秋 春門
 うさきあやもさるる秋の大空をさるる秋 春門
 めい入月さるる秋の大空をさるる秋 春門
 秋のさきもさるる秋の大空をさるる秋 春門

詩選

おきしほもし夜ふきほつちいふまてくまのころ
いふまてくまのころ
のころまてくまのころ
かきふきあつた月をわねふくまておあうらう
うらふまてくまのころ
さうまてくまのころ
なまふくまのころ
うらふまてくまのころ
侍ふまてくまのころ
盛光

おきしほもし夜ふきほつちいふまてくまのころ
いふまてくまのころ
のころまてくまのころ
かきふきあつた月をわねふくまておあうらう
うらふまてくまのころ
さうまてくまのころ
なまふくまのころ
うらふまてくまのころ
侍ふまてくまのころ
知澄

八月

山月

おきしほもし夜ふきほつちいふまてくまのころ
いふまてくまのころ
のころまてくまのころ
かきふきあつた月をわねふくまておあうらう
うらふまてくまのころ
さうまてくまのころ
なまふくまのころ
うらふまてくまのころ
侍ふまてくまのころ
春門

重なる風光を先を先とて山といふ秋の月 幾多
 も人の月もよくおとす光をさるる玉の横山 志言
 鐘の音はさるるまことておとす山を横山 月をさるる 乃々
 秋風よさるる煙をさるる月をさるる山 春光
 大ひえけさるるさるるまことて秋の横川の月をさるる 美足
 吉野の山をさるるさるるまことて秋の月 唐土
 秋の山をさるるさるるまことて秋の月 長記
 いづれもさるるさるるまことて秋の月 刻音
 うちもさるる大和の山をさるる月をさるる 明石の山 政春

此の歌を先を先とて山といふ秋の月 信行
 外山の山をさるるまことて秋の月 永久

河月

底清く新をさるるまことて秋の月 春門
 梅河波の山をさるるまことて秋の月 乃々
 隅田川の山をさるるまことて秋の月 秋施
 白川の山をさるるまことて秋の月 志言
 りくや曲の川をさるるまことて秋の月 高鞠
 大井川の山をさるるまことて秋の月 教昭

九月

麻

おどくもみ枕をさるるまゝもみ入るる
 秋ふらあるれおひいらふに梅燕の夢
 おもふまはらの入いもせいらせらるる
 秋庭の山後分ちるちるちるちる
 きふに秋入るふふふふふふふふふふ
 全

めももみ枕をさるるまゝもみ入るる
 秋ふらあるれおひいらふに梅燕の夢
 おもふまはらの入いもせいらせらるる
 秋庭の山後分ちるちるちるちる
 きふに秋入るふふふふふふふふふふ
 全

衣被のくちやあしきのふふふふふふ
 春思
 山は月をみれば花をみれば春をみれば
 散茂
 うち枕をうつふふふふふふふふふふ
 春之
 吹く風ねふふふふふふふふふふ
 春之
 ねふふふふふふふふふふふふふふ
 春之
 ねふふふふふふふふふふふふふふ
 春之

十月

落葉

神を月をみれば花をみれば春をみれば
 清彦
 梢の風をみれば花をみれば春をみれば
 之信
 山を月をみれば花をみれば春をみれば
 重孝
 ねふふふふふふふふふふふふふふ
 春之
 ねふふふふふふふふふふふふふふ
 春之
 ねふふふふふふふふふふふふふふ
 春之

いそぐまの井入まじきまはふといふ等ふ思
 是教
 土澄
 経香
 知都子
 きく子
 やれ子
 後子
 春門

十一月

鷹将

うらぐすか 路入まほなりもあきなりけ 淀入河風 道堪
 かきくちまじきふきの宿とあすのころは 晴入白雪 秋庭
 ねしめれまじきやふふ宿入なりけ 雪とちりく系 祥史
 大入るるとねめまねなりけいもあはれ 清信
 路入もあてつる大五入日次入るふるはつ年 之信
 文入るるとせり勢まづる豊入明の秘かるふし 美之

手にすゑーそ大層けしむれふいつこもろ夕嵐ふ 祐南
 りー夜多れ翹見たふもきれさるこのふ敷あふこ 経香
 ね指ま弱きけけけりる入みよりけ羽風いささうり 常之
 きり衣袖きくを相風ふとる、きりけ整入驚人 春門

寄風恋

あふ層きん入る月かき川か風さくきさ記り 主磨
 たのめくもめさるるうひてうに秋風入なききり 盛亮
 いっりけうきになれう中ふふ替いたえせぬ松入夕風 春光
 五れ入る吹風入そまたなきさいぬさうれなりり 貞明

ねと入るきさる風入きりけあう申こそきりき 吾平
 ふ飛るも入川風くまに波をまらるお思ひくれ 政明
 吹風入う入えあなちうあまつ袖そい時西きり 宣暢
 とふくそ人よんをうそかちよ秋風入ふときすそ 美之
 こそそ身よきむつもとそありにめれねむうぬねの松風 光卿
 めつねんだのそねよるをせてうそはきさう夕風 長記
 おりも入るあふあつれいねとまれぬ行入松風 道堪
 うき入るあひる風もねまつよ文り群をかにせん 知子
 人群あふしま風入くまにうそあくぬもそてうね 美子

ふ同くふきふのいね夕なふとふぬんうう 雲つ

新

うきふるふふ入仕ねにふふふふを想ふを首る	秋庭
ふせけてふふやつふふふ入ふふふふふふふ	嘉定
うふふにふふふ今に陰ふふふふふふふふふ	高輅
月のふふふ入ふて軒ちふふ入ふふふに風ふるあり	知流
うふふふ一陰ふふふふふふふふふふふふふ	美隆
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ	菊富
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ	春門

十二月

雪

弱ふて神ふふふふふふふふふふふふふ	美隆
なふふふふふふふ川風ふふふふふふふふふ	全
臨ふてふふふふふふふふふふふふふふふ	廣國
うふふふふふふふふふふふふふふふふふ	三壘
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ	幸健

村をけしむるにまふ勢をもちあはる山入雪はれ
 うもむきくねらあふふふきけお山う雪つれ
 名はちくまふいれいふ又わじれ入雪やう
 りなれ外山うふきふてかふあはぬ雪をれ
 大あきくあけ指うめして弱きまふ雪れ下る
 有るまふ入雪をういあじ入庭むちうなん
 春門

子鳥

國と入山のあじふ年をみまふにあらる川あう那
 うふあけうまふふふね風の勢あううあう鳴く
 春先

ゆきうう波うをれをたかく波波入うはの浦ちう哉
 うけむき月あきまふいふ入中あけまふ村ちう那
 あれなるうう種入うちううふあああけ入こあ
 月清きまふ川をうう入うちううあうあううあ
 舟ううゆきううあうけけつああああああああ
 小けあう入あうあああああああああああああ
 う風は磯は波入うああああああああああああ
 夕浪入うああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああ
 美之

か入るに心をなげきしに申へるは乃 秋庭
述ふと顯る入に乃おまひる中御代よりこそ 春光
あめつちか入まりしに申へるは乃 志
玉降るにある御代はあま入るに申へるは乃 彦國
むねおまひるに申へるは乃 重芳
これ紫のたふさるに申へるは乃 清隆
ハヨリ入るに申へるは乃 長元
ふと入るに申へるは乃 昭滿
天とす神入るに申へるは乃 終香

志とす神入るに申へるは乃 是
あまの紫のたふさるに申へるは乃 長好
ふと入るに申へるは乃 別春
たふさるに申へるは乃 宣暢
あまの山中を申へるは乃 南高
おろるに申へるは乃 美隆
いあへるに申へるは乃 正俊
とふはあまの申へるは乃 祐南
あまの神ふるに申へるは乃 重芳

枝乃いふもろけそと神入代と入大なるこもろけ
ふくろ花と実と神代より今をいふるなりとけり
この葉入るは申なる大葉よりいふひるき
こ入葉けしと申なりと申なりと申なりと申なり
ふ早根神入代よりいふ今をいふるなりとけり
四より海防のきねと申なりと申なりと申なり
ちより神代のきねと申なりと申なりと申なり
大入りかきと申なりと申なりと申なりと申なり
白きと申なりと申なりと申なりと申なりと申なり

大入りかきと申なりと申なりと申なりと申なり
る車申なりと申なりと申なりと申なりと申なり
より時をけりといふと申なりと申なりと申なり
いふと申なりと申なりと申なりと申なりと申なり
さつとやと國人入るなりと申なりと申なりと申なり
未ひるきと申なりと申なりと申なりと申なりと申なり
後時のきと申なりと申なりと申なりと申なりと申なり
るは道と申なりと申なりと申なりと申なりと申なり

信賢

春門

二十七	二十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十
道堪	嘉言	秋庭	常卿	高鞞	蕭東	長記	知子	知子	知子	知子	知子	知子	知子	知子	知子	知子	知子	知子	知子	知子	知子
常之	思之	春元	廣田	貞明	是教	緩子	理香	祐南	厚子	敦茂	敦茂	敦茂	敦茂	敦茂	敦茂	敦茂	敦茂	敦茂	敦茂	敦茂	敦茂
八美隆	七則春	一道	六重	禪野	美足	直入	直子	直子	直子	直子	直子	直子	直子	直子	直子	直子	直子	直子	直子	直子	直子
昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿	昭滿
所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子	所子



